**Chapter 9：クソ地獄（シットストーム）**

ブースター、シャワーズ、そして以前より少しだけマシになったサンダースの三人は、ようやく普通の郊外の散歩を楽しんでいた。

…地面が、また揺れ出すまでは。

「……また豚関係の事件だったら、あたし、マジでキレるからね……」と、シャワーズが低く唸った。

揺れを辿ってたどり着いたのは、大きな雪化粧のコテージ。そこは、マンムーとその優雅な妻・アローラキュウコンの家だった。

この老夫婦、昔から静かで落ち着いたタイプだったはず――今までは。

だが中では――完全なる修羅場。

部屋を荒らし回っていたのは、例のイタすぎる電気タイプ、ゼラオラ。手にはポケパッドを握りしめ、怒り爆発。

「なァんだコレ！？『ポーキーマン：氷の欲望』！？昨晩こんなもん検索してんじゃねぇよ、寒冷バカ野郎がッ！！」

アローラキュウコンは、いつもの涼やかな美しさを保ちながらも、気まずそうに笑った。

「…あれは……リサーチだったのよ」

「リサーチだァ！？この毛むくじゃらの尻尾でか！？バカにも程があるだろ！！」

その瞬間、室温がガクッと下がった。

アローラキュウコンが、恥ずかしそうに目を逸らした。

マンムーの目が鋭く細まる。

「……今、わしの嫁を何と呼んだ？」と、地の底から響くような声で尋ねる。

「バカだって言ったけど？」

ドン――地震。

ゼラオラは、まるでロケット団のニャースのように家から吹き飛ばされた。

叫びながら空を舞い――そのまま、オーロットの庭に突っ込んだ。

過去の出来事で未だに若干ぶっ壊れ気味のオーロットは、ゼラオラの頭が土に突き刺さった状態をぼんやりと見つめていた。

「……おっ、見ろよ」オーロットがぽつりと呟く。「肥料だ」

ここから、ゼラオラの人生で最も屈辱的な5分間が始まる。

ツルに引きずられ、沼にぶち込まれ、そして「バランスのため」と称して腐葉土を無理やり食わされる。

どうにか逃げ出したときには、糞まみれ、後悔まみれのボロボロな姿になっていた。

そして再び、マンムーの家の玄関にふらつきながら戻り――

崩れ落ちた。

――死んだ。

また。

その瞬間、「内なる平和の極意」という本を読み終えたばかりのホウオウが、空から溜息混じりに舞い降りた。

「……またか？」

神々しい不死鳥は、小さな神聖な炎を放ち、ゼラオラの汚れきった死体を清めながら蘇らせた。

そして――説教が始まった。

「ゼラオラよ。今月だけで三度目の復活じゃぞ。氷の乙女をバカ呼ばわりし、検索履歴のプライバシーを侵し、幽霊樹のコンポスト怒りで潰された……わしを過労死させたいのか？」

ゼラオラはまだ臭いまま鼻をすすった。

「……ただ……豚テーマのロマンスがどういうものか知りたくて……」

バシンッ！

ホウオウの翼が、容赦なく頬を叩いた。

「聞き方には限度があるじゃろうが！！」

イーブイ進化組の三人は、ただ呆然と立ち尽くしていた。

シャワーズがブースターの方を見て呟く。

「あたし、さっき言ったこと撤回する。うちら、全然まともだわ」

サンダースも神妙にうなずいた。

「……もう二度と、誰の検索履歴も見ねぇ……」